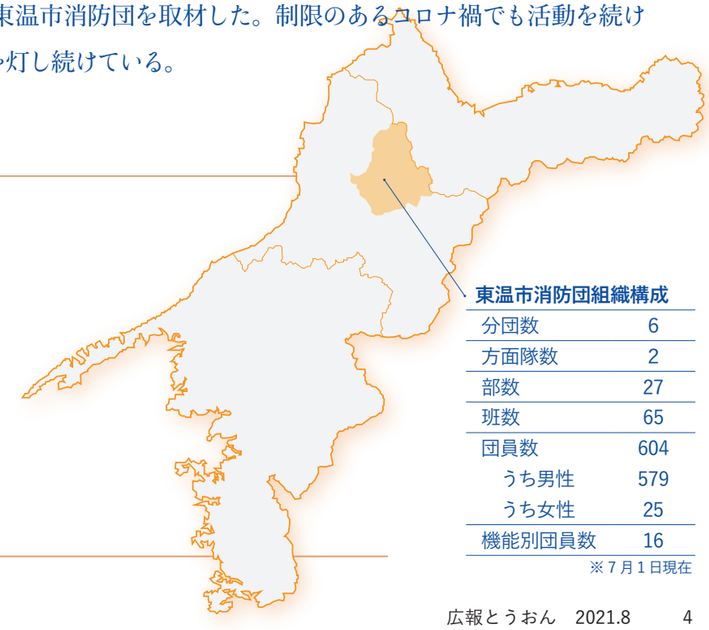
［特集］

心に使命の火を灯せ

from the determination to "protect people and community".

甚大な被害をもたらした平成30年7月豪雨から3年。幸いにも東温市に人的被害はなかったものの、私たちは改めて災害に対する備えの必要性を痛感させられた。
備えには備蓄品の準備や防災マップの確認などがある。一番大事なのは、一人ひとりの"心の備え"だ。「もしも」に備えて、日々訓練に励む東温市消防団を取材した。制限のあるコロナ禍でも活動を続ける消防団員は、地域を守る使命の火を灯し続けている。



東温市消防団組織構成

分団数	6
方面隊数	2
部数	27
班数	65
団員数	604
うち男性	579
うち女性	25
機能別団員数	16

※7月1日現在

消防団。消防本部や消防署と同様に消防組織法に基づき設置される消防機関だ。地域消防のリーダーとして、平常時・非常時を問わず私たちの住む地域に密着して、安心と安全を守るという重要な役割を担っている。

6月27日、全6分団から総勢約50人の消防団員が、緊急排水エンジンポンプの取扱訓練に参加した。消防本部前（横河原）で執り行われたこの消防訓練は、近年多発する風水害の影響で道路冠水や床上浸水などの発生を見据えた排水作業の技術習得が目的だ。

訓練に参加した第5分団第3部部長大石一弘（かずひろ）さんは「昨年は参加できず、今回初めて参加した。出番はないほうがいい。けれどもいざというときはすぐに対応しないといけないから、日々の訓練で学んでいます」と意識を高めた。

緊急排水エンジンポンプ取扱訓練の様子。消防団が普段使うのは45～60分の稼働が限界で、エンジンが複雑で泥水を吸うと故障する可能性もあった。排水ポンプは3.1時間の継続使用が可能で、吸水した泥水でもそのまま排水するので、作業も容易なのが特長だ。

効果が高い地域防災

災害が大きければ大きいほど、対応は遅れる。公助と呼ばれる自治体が行う救助、救援活動にはどうしても時間がかかる。そのため災害発生直後は、住民同士の助け合い、人命救助や初期消火への努力が被害の軽減につながることになる。例えば、阪神・淡路大震災（1995年1月17日発生）。日頃から消防団を中心に自治体と住民による連携があった淡路島の北淡町（当時）では、激震地であったにもかかわらず被害が最小限に抑えられた。

地域に住む私たちが主役となった防災活動が必要とされている。

消防活動はワンチームで

東温市消防団団長の中島幸一（こういち）さんは〝消防活動はワンチームで〟と、消防団員の意識改革に取り組む。

「防災と減災はどちらも災害への備えを意味していますが、それぞれ違った意味合いがあります。防災は災害を未然に防いだり、災害による被害を防ぐための備えです。一方で減災は、災害の被害を最小限に抑えるための備えを意味します。風水害は年を追うごとに深刻化しています。消防団としての活動も、いかに被害を最小限にするかを考えていく必要があります」

中島さんは、自治体とコミュニケーションを取り合い、地域に密着した消防団でありたいと語気を強めた。

心に使命の火を灯せ

from the determination to "protect people and community"

Focus 1

愛媛大学医学部
看護学科3年生
須田 純（じゅん）さん（21）

患者さんに寄り添ったケアができる保健師、看護師になるのが夢です。東温市が大好きで、せっかく4年間いるなら全力を注ごうと思い、昨年から消防団に入りました。愛媛大学の防災リーダークラブにも所属しています。秋に防災士の資格をとり、少しでも私にできることを身につけたいです。将来は、支援の手が届きにくい皆さんにも目を向けられるような人になりたいです。

Focus 2

東温市消防本部
総務予防課
消防団係

災害が起これば、組織の持つ消防力を全てかけるのが鉄則です。各地域で活動する消防団の皆さんは、日頃から地域内で顔の見える関係性があるので、よりきめ細かな消防活動がスピーディにできています。風水害が起こりやすい今の時代、地域の防災力は欠かせません。会社で勤務していても地域の消防団に入れるような職場の理解が深まることも期待しています。

若い力を育てる

『次の世代に任せたい』。どの組織でも担い手づくりは急務だ。副団長の森真和（まさかず）さんは「体力の必要な消防活動だから若返り、世代交代をどんどんしていくべきだと思っています。同じ世代が活躍していることは加入を考える人のハードルを下げてくれますから」と話す。自身が入団した約30年前も同世代の存在が安心感につながったそうだ。

現在の東温市消防団は若い世代が多い。同じく副団長の渡部政近（まさちか）さんは「自分が入団したときは若い世代が私一人だけでした。心細かったですね。同世代が加入してくれたときは嬉しかった。現在は若い人が多く活気がありますね」と笑う。重信方面隊長の國安計祐（けいすけ）さんは「消防団は地域とのつながりを作るのに最適な場所です。もちろん大先輩がおられる前では自分の思うとおりにはいきません。しかし顔馴染みになり、普段のちょっとした困りごとでも相談に乗ってくれる関係を築けます。地域に根を張った生活もいいものですよ」と伝えた。

活動しやすい環境づくり

近年の風水害は長期化することも珍しくない。対応には相応の備えはもちろん活動を要請する消防団の処遇改善にも目を向けなければならない。重信方面隊長の髙市勝（まさる）さんは「心配しているのはライフジャケットがないこと。最近は水害の発生も多くなってますからね。他市と意見交換すると、東温市の装備品に懸念が残ります。また土砂災害が発生した場合は、コンクリートや壁を破壊して家屋へ侵入するための装備が必要でしょう」と危機感を募らせる。川内方面隊長の近藤和久（かずひさ）さんは「一体感の魅力を伝える。「活動報酬や手当は他自治体と比べて少ない方です。ですが活動の魅力はお金だけではありません。地域の行事ごとがあると活動の中心は消防団に入っている人がほとんどです。それほど地域の一体感が消防団活動で育てられています。引退した皆さんも〝機能別団員〟として行方不明者の捜索や機材の整備に力を注いでくれます」。世代を超えて消防団で培われた連帯感は、失うことのない地域の宝だ。

川内方面隊長の徳野守（まもる）さんは「隊長は団長と分団長のパイプ役であり、必要なのは1秒でも早い判断です。指示を待つだけでは遅れが生じて、被害の拡大につながります。状況を確認して最善の対応を団長に提案します。それは私が分団長だったときの隊長を見て学んだこと。次の世代へ引き継ぎたいですね」と力を込めた。

性別の違いはジレンマに

しかし全てが前向きに進んでいるわけではない。女性部班長の髙橋知佐子（ちさこ）さんは「性別の違いによるジレンマを抱えながら活動している人も大勢います」と話す。「実際に災害が起こった地域の女性消防団員に聞くと『現場でできることが限られていて悔しい思いもした』と話されています。夜間の捜索活動や救助活動では男性に頼る部分も出てきます。消防団には女性防災士として志を持って活動している団員もいますから、もっと横のつながりを大事にして女性にできること、女性だからこそできることを共有していきたいです」

心の備えはできている

中島団長は「自治体、消防、消防団、そして地域がスクラムを組んで防災、減災活動に取り組んでいきたい。南海トラフをはじめ風水害に対する心構えはできている。地域密着型の消防組織として、ワンチームでふるさと東温市を守りたい」と締めくくった。災害に対する使命感の裏には、地元を愛する気持ちがある。

心に使命の火を灯せ。

次のバトンを受け継ぐのは、あなたかもしれない。

女性部班長
髙橋 知佐子（ちさこ）さん（南方西）

「志の高い人が活躍できる消防団でありたい」。女性の立場から、“より良い消防団”を模索する。

川内方面隊長
徳野 守（まもる）さん（町西）

団員歴23年。大雨の日は周辺の見回りを欠かさない。「先輩がやってきたことを私もやりたい」

川内方面隊長
近藤 和久（かずひさ）さん（河之内）

団員歴36年目。父からの世代交代で消防団に入団。山間部でも担い手の育成に力を注ぐ。

重信方面隊長
國安 計祐（けいすけ）さん（西岡）

宇和島市出身。転入後、30年以上消防団員として尽力。「災害が少ないのも東温市のいいところ」

重信方面隊長
髙市 勝（まさる）さん（牛渕）

26歳から36年間消防団。「自営業だから、自分にできることで東温市に還元したい」

副団長
森 真和（まさかず）さん（下林）

30年ほど前に消防団入団。「災害時、迅速に対応するには、普段の鍛錬は欠かせません」

副団長
渡部 政近（まさちか）さん（奥松瀬川）

入団して34年。「建築業を営んでいます。建物が火事でなくなるのは心が痛みます」

消防団団長
中島 幸一（こういち）さん（町東）

団長2年目。自営業の傍らラグビーにも携わる。消防団員の意識改革に取り組む。